

研究主題「二つの障害種の手だてを生かした、児童が成就感を味わうことができるような指導 —知・肢併置校、肢体不自由教育部門（知的障害を併せ有する教育課程）で学ぶ児童への指導を通じて—」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
都立城北特別支援学校 主任教諭 鈴木 淳志

第1 研究のねらい

東京都では、特別支援学校、知・肢併置校10校が平成32年(2020年)度までに全校が開校する。東京都特別支援教育推進計画（第二期）・第一次実施計画—平成29年～38年—（平成29年2月）の、第1部、第2章「第一次実施計画 特別支援教育推進計画(第二期)の必要性と性格」において、複数の障害教育部門を併置する学校における複数の障害のある児童・生徒への効果的な指導方法等を、他の特別支援学校等に普及させていくことが必要であると示されており、特別支援学校、知・肢併置校の更なる教育実践の充実が求められている。

所属校には、障害や基礎疾患等から学習活動に取り組むことが難しい児童が在籍している。そうした児童の指導において、知的障害特別支援学校での実践経験を生かして、課題の手順を視覚化する手だてを取り入れたことで、少しずつ学習への意欲がみられるようになった。この経験から、私は各障害教育部門で実践を重ねている様々な指導方法を共有し、児童が指導の過程で、成功体験を積み重ねられるような指導方法を開発し、発信していきたいと考えた。

本研究では児童の実態を把握し、二つの障害種の手だてを生かした指導を自立活動で実践する。このことで、児童は成功体験を積み重ねることができ、成就感を味わえると考え、研究主題を設定した。

第2 研究仮説

知・肢併置校、肢体不自由教育部門(知的障害を併せ有する教育課程)で学ぶ児童の授業において、二つの障害種の手だてを生かした指導を行うことで、児童は成功体験を積み重ねることができ、成就感を味わい、自信をもって学習に取り組むことができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 成就感についての定義

本研究では、成就感を「児童が成功体験を積み重ね、学習への苦手意識や困難さを克服することで味わうことができるもの」と定義した。

また、児童が成就感を味わうまでの過程を「見通しをもつ」から「できた(成功体験)」までとした(図1)。

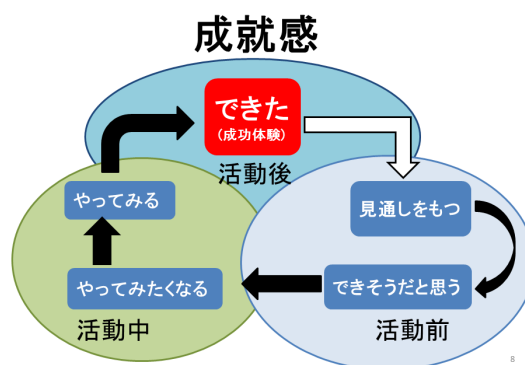


図1 「児童が成就感を味わえるまでの過程」

(2) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（平成30年3月）における成就感に関する内容の把握

個々の児童の実態を的確に把握した上で、指導すべき課題や相互の関連を整理し、成就感に関わる目標を設定するために、「課題関連図」を作成する必要がある。また、小学部・中学部学習要領（第7章第3の3）について、「児童・生徒の意欲的な活動を促すためには、児童生

徒が興味や関心をもって主体的に取り組み、成就感を味わうことのできるような指導方法を工夫することが大切である。」と解説されており、児童が成就感を味わえるような指導を自立活動で実施する有効性を把握した。

(3) 東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画に向けての実践事例の把握

「特別支援学校の教育内容について」（東京都教育委員会、平成 26 年 3 月）では、肢体不自由教育部門で実践されている「学習習得状況把握表」の活用や、「座位保持椅子」、「個々のニーズに基づく食形態の提供や自助具の工夫」を知的障害教育部門で取り入れてみることで、知的障害教育部門で実践されている「視覚支援ツール」や「学習環境の構造化」、「視覚刺激や聴覚刺激を軽減する手だて」を肢体不自由教育部門で取り入れることなど、知・肢併置化に向けての取組が例示されている。相互の特徴ある実践を共有することにより、両障害教育部門の教員間の連携強化及び個に応じた指導の充実につながることを期待できる。

(4) 複数の障害教育部門を併置する学校の取組内容

教室シンボルマークの使用や、校舎の棟ごとに色で分けるなど、児童の分かりやすさを意識し、肢体不自由教育部門と知的障害教育部門の枠を超えた取組内容を把握した。

(5) 「御用学習」の実践例の分析

「御用学習」は教員の指示に従って、物をもたらってきたり、渡してきたりすることを目標とする学習である。児童に合わせた指示内容が設定できるので、集団の中での個に合わせた指導を行う上で有効である。また、検証授業の対象児童の実態から、自分の好きなものや興味があるものを買う活動に関心をもって学習に取り組むことや、教員とのやりとりから評価を得ることで成就感を味わいやすいと考えた。

2 調査研究（平成 30 年 8・9 月実施）

都立特別支援学校、知・肢併置校（5 校）及び肢体不自由特別支援学校（1 校）の教員 191 人を対象に、学習指導や日常生活の指導における効果的な指導方法の事例の収集及び分析を行った。

調査結果から、児童が進んで取り組みたくなるような構造化、視覚化、障害特性に応じた教材・教具の工夫や、本人の意欲を引き出す手だての工夫がみられた。その中でも、児童に見通しをもたせるための手だてであるスケジュールを用いた授業の実践や、他障害教育部門の経験を現任校の実践にどのように生かしているかについてまとめた（図 2）。

(1) 調査結果

学習指導や日常生活の指導における効果的な指導方法の例として、肢体不自由教育部門の担当教員からは学習への集中を促すための座位保持椅子の使用、操作をしやすくするためのスイッチ教材の使用、音や歌で学習に興味・関心をもたせることなどが回答として挙げられた。

知的障害教育部門の担当教員からは、児童に見通しをもたせることを目的とした予定カードや手順表等の視覚支援教材の提示、毎回の学習の流れを一定にした授業づくり、気持ちの安定を目的としたセンサーエリアの設定、サインで要求表出を促すことなどが回答として挙げられた。複数の障害教育部門を経験している教員のほぼ半数が、これまで経験してきた障害種の指導方法を取り入

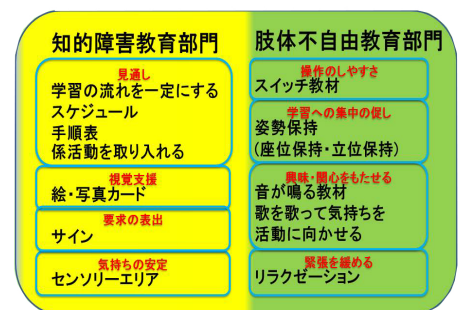


図 2 効果的な指導方法の事例

「二つの障害種の手だてを生かした、児童が成就感を味わうことができるような指導
 ー知・肢併置校、肢体不自由教育部門（知的障害を併せ有する教育課程）で学ぶ児童への指導を通じてー」

れていることが分かった。

視覚支援(スケジュールの活用)は、知的障害教育部門において一般的に行われている手だての一つであるが、知的障害教育部門担当及び知的障害教育経験教員の75%がスケジュールを活用し、肢体不自由教育部門においても、25%の教員がスケジュールを活用していることが分かった。児童の障害の多様化、重度重複化が課題とされている中で、他の障害教育部門の手だてを取り入れ、指導を行うことは、より児童が成就感を味わえることにつながれると考える。特別支援学校、知・肢併置化の利点を生かすよう、二つの障害種の手だてを取り入れた指導を更に充実させる必要がある。

(2) 二つの障害教育部門にみる指導方法の特徴

基礎研究、調査研究を基に、二つの障害教育部門の指導方法を以下のように整理した(表1)。

今回の調査結果から、二つの

表1 調査結果からみる二つの障害教育部門の指導方法(複数回答)

障害教育部門の手だてを整理し、児童の実態に合わせた支援プログラム(表3)を設定して、検証を行う。

知的障害教育部門 (115人)		肢体不自由教育部門 (76人)	
・発達段階を考慮した学習や指導の工夫	75人	・自立活動担当教員と連携して把握した指導の工夫	36人
・学習環境の構造化	15人	・補助具・自助具	4人
・視覚支援 (スケジュール提示)	44人	・AACの活用 (拡張代替コミュニケーション)	4人

3 開発研究

児童の実態を把握すること、「成就感を味わうまでの過程」に沿って各児童への手だてを整理すること、複数の教職員で授業を振り返り、指導方法や評価の共有を行うことが、本研究の検証において必要であると考え、「指導支援資料(図3)」を開発した。

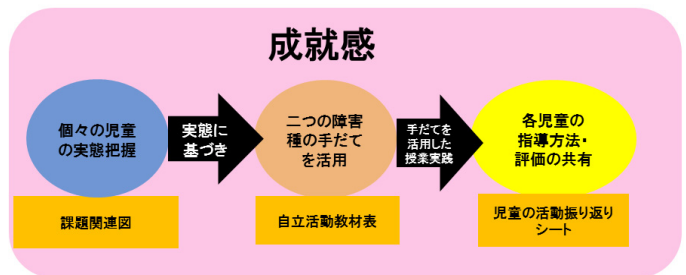


図3 「指導支援資料」活用の流れ

(1) 自立活動教材集

アンケート調査の回答結果を基に、学校現場で実践されている二つの障害種の手だてを、「成就感を味わえるまでの過程」に沿って把握する資料である。

(2) 児童の活動振り返りシート

学習グループの教職員(学校介護職員を含む)で学習における児童の様子を評価し、振り返りを行う。児童の実態を把握し共有することで、担当以外の教員も児童の実態に応じた指導を共通の視点で行えると考え(表2)。

表2 児童の活動振り返りシートの一部

活動	知的障害教育	肢体不自由教育	成就感に関する児童の行動	✓	児童の活動の様子
① はじまりの挨拶 姿勢を正して、はじまりの挨拶をする。	・挨拶の言葉の精選 ・言葉とサインや手話での挨拶(児童の分かりやすさ)	・一定の活動の流れ(見通し) ・座位保持椅子(集中の促し) ・個に応じた教材提示(視覚教材の見やすさ)	★ 背筋を伸ばして、はじまりの挨拶をする。		教員に注目している。
					教員の合図を聞いて、身体を動かしている。
					教員の合図に合わせて、背筋を伸ばそうとする。
					姿勢チェックシートへの評価を確認している。
② スケジュールを確認する	・スケジュールカード ・スケジュールボード ・姿勢チェックシート(視覚支援教材)		★ 本日の活動の流れを知る。		提示されたスケジュールカードに注目している。
					提示されたスケジュールカードに触れようとする。
					提示されたスケジュールカードに指を差している。
					予定を言葉で確認している。

4 検証授業

(1) 検証授業における指導方法について

表3 検証対象児童の「支援プログラム」

調査結果から分析した二つの障害種の手だてを検証授業の対象児童Bの「支援プログラム」に位置付け、集団学習と個別の取組を通して検証を行う。「課題関連図」での実態把握

児童/学習内容	部門	(1)「御用学習」		(2)「個別の取組」
		選択する	伝える	
B (検証対象児童)	知	・絵カードの提示 ・学習環境の構造化	・教職員の促し (言葉掛け)	・スケジュールカード ・ごほうびシール ・本人が記入できる 評価カード
	肢	・触ってみたいくなるような 野菜や果物の形を模した教材		・操作しやすい位置への 教材配置

から成就感に関する課題を抽出し、個に応じた具体的な指導内容を各活動で設定した。各児童の「支援プログラム」(表3)では、「課題関連図」から把握した見通しとコミュニケーション面の課題に対し、知的障害教育部門のスケジュールや評価カード、学習環境の構造化による見通しの手だて、そして肢体不自由教育部門の姿勢の保持と教材配置の工夫を設定した。

(2) 検証児童の成就感の変容について

表4 児童の活動振り返りシートからみる児童の変容

表4は「児童の活動振り返りシート」(表2)で各活動の目標達成度を設定して、数値化し、第1時から第4時のチェックの総数を比較した結果である。目標達成度の総数が23ポイントから46ポイントへ、23ポイントの増加がみられた。

児童が成就感を 味わう過程 時数	見通し	できそうだと思う やってみたくなる	やってみる	できた	総数
	第1時 チェック数	5	9	5	4
第2時 チェック数	6	10	8	4	28
第3時 チェック数	8	12	8	5	33
第4時 チェック数	9	17	12	8	46

「御用学習」では、検証対象児童が課題成功の際に身体を動かしたり、言葉を発したりするなどし、段階的な成功体験を積み重ねて取り組む姿を観察することができた。

「個別の取組」では、課題ボックスや評価シートを教材として使用することで、主体的に学習に取り組む様子を観察することができた。「児童が成就感を味わえる過程(図1)」における「見通し」に関しては、各児童の教材の「見え方」を意識した指導方法が、「できた」に関しては、ホワイトボード全面に評価カード(はなまる)を貼って評価することや、集団での評価後に再度個別で評価することが、成就感を味わえるために有効な手だてであると分かった。

第4 研究の成果

「指導支援資料」を活用して、実態把握、手だての活用、指導の振り返り(評価)を行い、成就感を味わうことができるよう効果的に授業改善できたことが、本研究の成果である。

第5 今後の課題

所属校にて、「指導支援資料」を活用した授業改善を重ねていき、他の特別支援学校においても、充分活用できる資料にしていくことが課題である。